

32

寛永諸家譜

清和源氏戊二冊之内
頼親流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186	(32)
函號	特	76	1

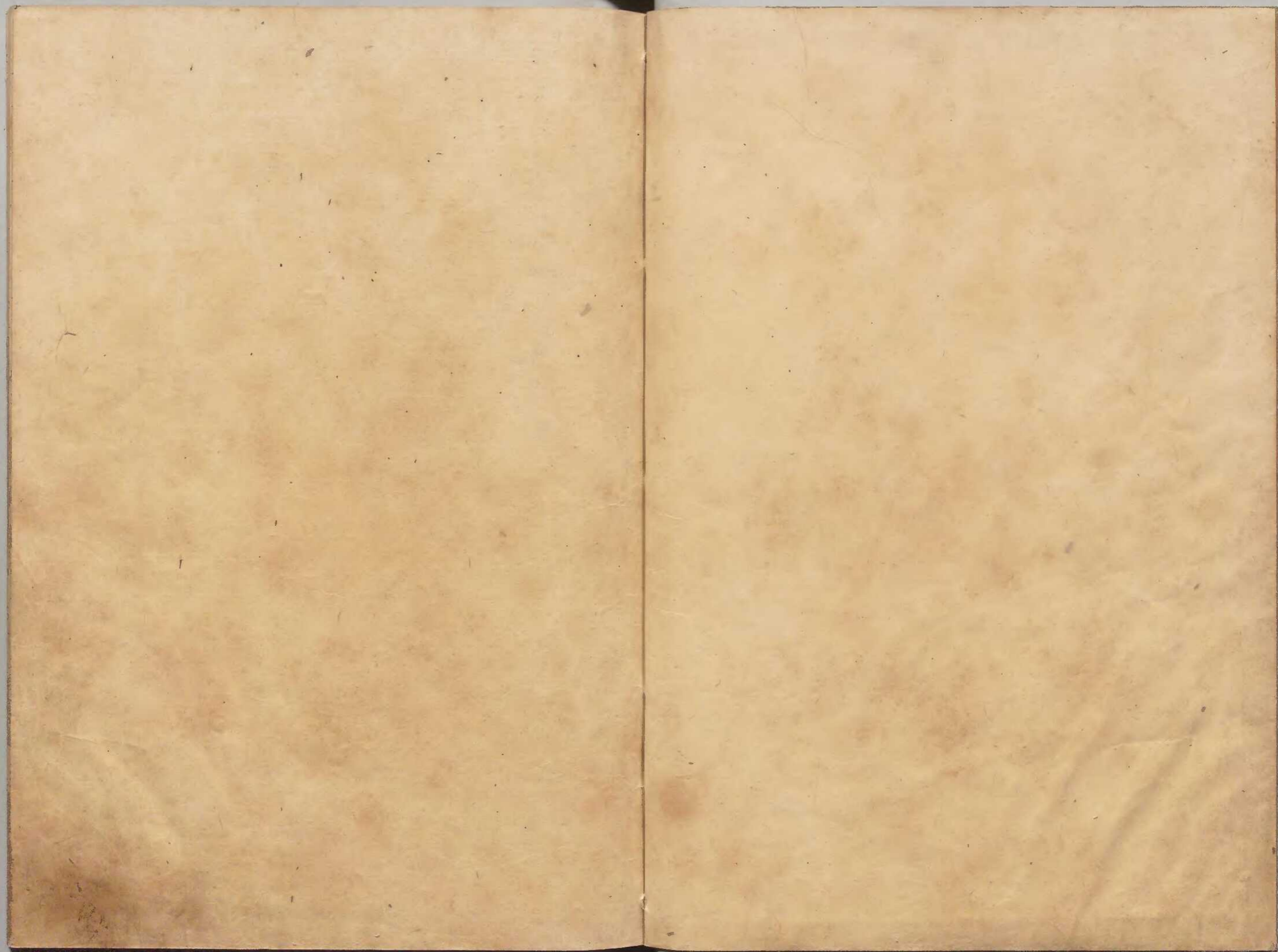


Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

© Kodak, 2007 TM, Kodak





高木

寛永諸家系圖傳

清和源氏

頼親流

高木

戊一

淺草文庫

大和守頼親七世乃孫判友代源信光
 けいめく高木と号し其子孫は
 かきて或名尾列小居一或名之
 列小居も先祖家傳乃系圖并小
 源高氏弼より先祖小居より所

のち乃 未行 等を代官木の惣領八郎
とすそのこまをお侍
文祿乃比りおらひて三列碧海の
郡竹村小領と家長のけり
死て垣なりこま小らひて系圖
信長と

宣光

六郎次郎 三列碧海郡牧内村小領

永祿九年二月二日死八十二歳 法名性玄

清秀

若次郎 自水助

母乃酒井平兵衛正信女

大永六年三列牧内村より生る

少年より水野下智守信元小房にて

尾列智多郡緒川小領

天文十年三列新屋合戦乃時今村

伊賀守信繩と曰く、いがのしゅのしゅ 下で残とあ
り、まふ 清秀十六歳を、そのち 好友ありて、まうけの 下將
守り評をさして、まうけの 織田弾正忠信、まうけの 秀小房
と曰十七年三列小豆坂と、た 弾正忠と今
川義元、が 軍勢と合戦のとき、まふ 清秀
とめく残を、まふ 何れもはあふ令あひ首を
とりて、まふ 又先陣小すまんとするを
弾正忠志わくこまと、まふ ためて、まふ 籠下に
い、まふ 先時の慶長とて、まふ かつか

碓石をさつて、まふ ばき日麻呂とて、まふ なる
の、まふ 清秀と山口平兵衛、まふ 盜政二人なり
其後三列安祥のうら小をひく加増
の、まふ 東地を、まふ 小豆尾列、まふ 香懸の
り小おかく、まふ 加増を、まふ まるる、まふ 好
下將守たびくこまを、まふ ため、まふ 又
緒川小還也
曰二十二年、まふ 豊清乃御、まふ 尾列村木の元
出、まふ 緒川の軍勢、まふ こまとせり

時清秀先^{きよひで}うけりて城戸^{きやう}京^{きやう}ふもみ

入をうららる敵^{てん}このとき城戸^{きやう}をさす

史清秀城戸^{きよひで}をのこんともろ所小橋^{せうせう}

ら張^やをひてこまをつぐこの時清秀^{きよひで}

底^きをうら

永祿三年三列并屋小^{えいりく}といて恩濟^{おんさい}れ

御鑓^{ごせき}と合戦^{くわせん}の小^{せう}史清秀先^{きよひで}かり

て張^やをひて敵^{てん}とら

日四年恩濟^{おんさい}乃御鑓^{ごせき}尾列緒川^{おのり}小出張^{せうしやう}

まのうらはげきくろ史清秀敵軍^{きよひで}

をえんこあ只一騎^{ひと}なりあてを

むよこまふらて緒川^{おのり}勢^{せい}はいて

石^{いし}濃小^{のうせう}をみ合戦^{くわせん}の史清秀^{きよひで}緒川^{おのり}

伯耆^{へき}自守^{じしゆ}と一番^{いちばん}り張^やをあを又^{また}本

多肥^{たひ}後^ご植村^{うゑむら}庄^{むら}右^{みぎ}馬^まと張^やをあを

其^{その}後^ご水^{みづ}輪^{りん}坂^{さか}次^{つぎ}高^{たか}をせきくろ史清秀^{きよひで}こ

まをえんこ汝^なとらまはふまを

庵^{いん}とてすかりん入^{いり}もむむ小^{せう}ら

諸士も又ははいつくまゝにこそとき清秀
張ともいひて敵とほく取治すを首と
ゆふらば日敷度れ合戦し清秀能
とありまゝ七度なりこそまゝと
石瀬小おむく度く合戦のとき清秀
敵しありて功をなまきし
なり

曰六年三列一向宗一揆をおこし翌
年水野下野守思崎乃御城小属より

とき清秀力戦して敵をくさり

東照大権現小舘しそまひる

曰七年清秀下野守小属ととも
先祖の名田三列大思乃領内小あり

の

大権現こそをきこめやすかりし御
判然とし海りそにこそを不持
元龜元年に引姉川合戦のとき
軍功あり

天正二年乃秋織田信長御列長崎の
一揆をせむるに嫡子光秀と也も
一我功なり時小光秀先小吉にて
疵をうりて清秀敵をきりけり光
秀をくまけて味方乃軍にいつも
乃り又曰國濱乃地荒小おあて一揆と
合我れと一揆の勢つとて味方志
づり利をいしなり緒川前登れ軍勢も
敗をせんともう時清秀只一騎たくり小

凶徒乃中小坊り入を信長高所を是
をえしあひてさしまたるに羽織と着て
先一すむものいさむめくこれ言本
よりあな〜とのこもよもかりし清秀
もんでるせむし誌士こもて見て
はびりてきほひのあへ一揆はあり
敗小もこの時賊徒乃り感林坊と
徳をいもせても首をい信長大小
感悦一たまふ

曰三年三別也（三ノ別）藤合戦のとき軍勢（軍勢）で
さげさげと敵をうらさり敷ヶ原の底（敷ヶ原の底）

とさげさげ

曰四年大坂門徒河列十七ヶ所（大坂門徒河列十七ヶ所）ありた

てこもり信長こそとせし是より（信長こそとせし是より）

水野下野守死する小より緒川新屋の（水野下野守死する小より緒川新屋の）

諸士信長乃命小より依久右清つ尉（諸士信長乃命小より依久右清つ尉）

信感一属も清秀も又このより（信感一属も清秀も又このより）

あり依久右清秀を流りて陣場（あり依久右清秀を流りて陣場）

とさげさげとさげさげ地よりさる依久（とさげさげとさげさげ地よりさる依久）

先小より下り陣をゆるよのせえて（先小より下り陣をゆるよのせえて）

依久右清秀がさる本小（依久右清秀がさる本小）

いゝ敵のさるも足姫をかさる（いゝ敵のさるも足姫をかさる）

か乃陣のさる下りといのくらも小及（か乃陣のさる下りといのくらも小及）

敵さる下り乃陣をおびやうもい（敵さる下り乃陣をおびやうもい）

加珠を依久右清秀がいさる（加珠を依久右清秀がいさる）

陣をさる敵さるも家陣ふさる（陣をさる敵さるも家陣ふさる）

角一味方の陣とさるさるりて加場（角一味方の陣とさるさるりて加場）

と決りし事なれどいひれはさう
てかの陣屋が本をこものも一敵そ
まらきうひきこるといふ味方御
とてくまふふらあてをさる本
つゝすうりて賊兵をさひく川は
曰五年松永弾正の弼久秀和列信を
乃城一こころに織田信忠を
をせむの時清秀二の丸乃門際小てあて
一番一終をいへせ首級を均り

曰六年信長荒木持津守村重がして
こころを思乃城をせめたも時清秀
并中清方次男一吉昌一番一掃小
つこの時城沖乃兵法くして味方
一城はくものお月一是小ら信長
兵をかさめくか

曰十年

大権現高木九助正廣を御法くひして
御籠下り一属を寺の首領命あるに

うわ甲別新府池射陣のとき

大権現を相いくまつりまかりり領地り

子石をくまりり

曰十二年尾列小牧沖陣の時清秀と

内友かいまりり正派まあ人沖ゆ目射めとなり

て諸率しよを下げ知ちりり時清秀沖ゆるま相

領り

四月九日かくても合戦あの時敵陣て入り小

むいりりとくく敵あういきる時清

秀馬ひとあてて遣ちをいりりはきおり

て部ぶ等ら小共首そのをいりりめ沖ゆ旗は

一沖合戦いの勝利せをいりりはきおり

旨しよ頭づ進まり

大権現沖感ありり合戦勝利あをいりり

のり首かも沖實あ換かのき又まりり

小幡この旗は入りりはきおりり

一いけは

大権現あをいりり

曰十八年相列小田原陣一役を
大権現関東を領一たす一内相列武列
と繼のうらにおわく五子石の采地とた
まし諸役をゆるさる
文祿元年朝鮮陣乃とき清秀老年
一おらび因災をくくあつて
大権現御渡海の冥吾をきくしめ
肥列なきやふし
大権現志をかんとたもの命ふめて

秀吉(まみゆ秀吉あつめその名を
あつて)て羽織をくはる
曰三年家督を子正次小ゆづりて相列
東那海老名村乃領地一隠居し
後慶長年中
大権現御齋野のほくに清秀電小
渡御河りてあなまて御齋乃居并
一御腹を好飲を
曰五年會津御陣乃と以御陣役を

向きりしとていづも御跡を尋ひしひく小出
小出り

大権現を御しつゝもつらかりし是を

感下たまふ又そらり中郡家小出り

台徳院殿小出みゆを志を御感懐あり

下綿乃御御織をたまふは徳小出

しきのよりのもきりしとていづも志わく國小

出家庵より一教令河つ小出り

より國小出(右)右の糸少よりとて

教度乃武功河りといへども揚西并り

年月分明なごらるるを述を略せ

曰十五年七月十三日相列小出おと死

年八十五 法名性順

清方

甚太郎 母とにおなり

天文三年三列牧内村一して生る少年

乃時より足清秀と同く水

野下将守信元一属也

永禄四年思清乃冲城尾列绪川小

出陣のとき横根村小おわく相戦

継友助をうりてる羽立白又石瀬合戦

乃とき成瀬新右郎をうりてるを

二乃首を後日一一族のものし

よゆこまをいふ

曰五年三列荒川乃よりかへおそ

清方一人城戸小ら入款をうりて

首をゆり

天正六年播磨立恩乃城とせむら時

依久男がふつづく城の屏を

乃系とき底をうりてるを清水

和泉守忠重一属也

曰十九年

大権現冲旗下一属を命まのむ

祿高本丸助正廣鉤合を流す

ゆこまより流す一属を命まのむ

孝じょう

度乃軍功たのぐんこうありといひてもその場ば不ふ并びやう
敵てき人ひとの助すけなりなりとといひ人ひとこそこそままとといいひひけけりり
慶長四年十二月十日まがひ相あ別べりりゆゆくく終はりり
年六十六しほ法は名な津つ林はやし

女子

今林伊賀守いまはやし信繩のぶなづなの妻めかけ

孝

大田おほの彦ひこ次つぐ正勝まさかつの妻めかけ

眼部くまぶた之の右みぎ馬うま正次まさつぐの妻めかけ

孝

小林こばやし次つぐ郎らう右みぎ邊へ信隆のぶたかの妻めかけ

清政

太田彦次郎 母ハ大橋助兵衛の女

永禄元年尾列緒川少右衛門

太田彦九郎正近

大権現一は久くそそままつつるる三三列列長長藤藤少少

ううらら死死一一をを跡跡ををつつるるののななききゆゆ

大権現乃命小より天正三年太田の家

ををははつつくくははくくままるる

長久長久も小田原園ヶ系御陣小供を

元和五年六月四日武列少く死を六

十二歳法名淨徳

子孫こもはり太田の系属小

より

清本

甚右衛門

母ハ小おな

永祿三年尾列緒川小生

天正十九年父清方ととも

大権現小法之とそまつる園ヶ原大坂

あ度乃所陣

台徳院殿の侍

寛永八年正月廿七日武列を死

七十二歳 法名順教

元吉

弥次左衛門 為右衛門

天正十七年尾列緒川小生

元和元年大坂陣乃とき高木

水正次小属一丁五月七日天王寺

早川合戦をけりしり小生

元吉もく敵陣小乃りて城

乃ききかりいそるこみ城織部

信茂久保源之郎志知同半助

長重もたがひりしり守

寛永九年四月十日橋列大坂之役
四十四歳 法名善教

信次

茂右衛門

寛永二年武列に
生る

同九年元者
是跡を
将領を

同十七年

將軍家
（法之）
生る

清實

安右衛門

母上
甲

天正七年尾列
緒川
生る

慶長三年

大権現
一法之
生る

関系并小大坂
あ度
の陣
生る

供
生る

白徳院 敬

將軍家（法久）之（子）也

清正

大郎次男

慶長十一年相列（見）也

元和三年

台徳院殿を（見）相列也

助方

甚太郎

慶長十二年相列（見）也

元和九年

將軍家（法久）之（子）也

清貞

久次男

慶長十五年相列（見）也

清吉 きよきち

甚兵衛 母は上田氏

天正十一年尾列緒川小生る

孝長四年

大権現小法師 おほごんげんこしょう

関原大坂為度乃陣小生る せきがはらおほさかたけのじんこしょう

孝 たか

長坂弥右衛門妻 ながさかやえもんめかけ

孝 たか

花井市左衛門妻 はないしざえもんめかけ

光秀 みつひで

善次郎 母は水野周防守元氏女 ぜんじろう 母はみづのしゅうぼうすけもとうぢめ

永禄二年尾列緒川小生る えいりくにねんおしりょうせきがはらこしょう

天正二年九月廿九日御列長鴻 てんていにねんしゅうがつにじゅうくにちごりょうながこう

おわて一揆蜂起のとき父清秀也 おわていぎはちゅうきのおとこちちみつひで

こゝに先陣せんじんをみりて敵てきをうらみて
少信すけのぶもこゝを感かしてあつて茶ちやを
たまはる療治りょうぢをくりしとて
あつて羽はの日はわたり死しもあきふ
十六家じゅうろくけ法ほふ名字なづな茶ちや

一書

内膳うちぜん 後小志摩守ごせまのしゅと号なづなも
母ははハトリー印いん

少年せうねんより父清秀ちよしゆとあつて水野下膳みづのしげ
守しゅ信のぶえ小属せうぞくも
天正六年てんしやう六年播磨はりま在郷城ざいじやうじやうをせひつあき
依久よひく男おとこがもつり属ぞくして父清秀ちよしゆと印いん
く屏へいをのり疵きずとつて

曰十年父清秀

大権現おほいけんげん一法いちほふつてそまひあつて
領地りやうぢをつつく水野和泉守忠重みづのわづなむねしげ一
属ぞく

日十二年尾列^のと久も合戦^ののとき多將^の
忠重^のもいついて敵^とうらそ首^を切

日十八年小田原御陣^ののとき忠重

くみめて教向^も

文祿三年

大権現乃命^の小^のり薩摩守忠重^自

了つふ

慶長五年圓原御陣^の時忠重^自小

寺^のひて教向^一先陣^小まみ

一と名^を味^方つ^てくま^るもの

一吾^をも^のて彼^に授^けても

其^の後尾列^義忠^卿小^法大坂^の

陣^乃時尾列^と城^乃守番^とは

と寛永元年九月十日尾列^と

死^も年六十四法名^性參

右任

修理 母八依治備中守為繩女

天正十二年尾列緒川一守

尾列義忠卿一子

右忠

心膳 母八石川守信光女

慶長十年尾列小守

右重

心平 母八上小守

慶長十四年尾列小守

右平

久大吏 母八上小守

元和四年尾列小守

右頼

中三郎 母ハ上小右

元和五年尾列小生

右继

白馬助 母ハ上小右

寛永六年尾列小生

右信

忠右衛門 母ハ上小右

天正十七年尾列緒川小生

元和元年

右徳院殿一法之者之末川

曰年大坂陣乃之記言本自水正

正次之みそ之修

寛永元年大番乃組取

為次たあつ

花太郎

寛永九年武列あ江戸小生せう

同十八年

將軍家と相あ一い堂だう々々山さん家か

為孝たか

番書助ばんしょすけ

母はは上の上小の生せい

天正十九年てんしやう武列ぶ江戸小生せう

為次たあつ

弥太郎やたろう 母はは上の上小の生せい

文祿三年ぶんろく相列あ江戸小生せう

慶長十四年けいぢやう

白徳院殿はくとくゐん江戸小生せう

同十九年どう大坂陣おさかじん乃の以い去き波なみ山城やまぢやう

定義組ていぎぐみ母はは上の上小の生せい

元和元年大坂再乱のとき、大坂山崎守
組めて江戸御本丸御守番をつとむ

曰二年

台徳院殿の命小より後河忠長卿小

法しん

寛永十一年

將軍家（可）おさる

長なが

源太げんた

寛永八年武列（可）江戸（可）おさる

曰十七年

將軍家（可）法しん之（可）江戸（可）おさる

宣行のりゆき

与（可）右邊（可）母（可）ハ（可）上（可）小（可）同（可）

慶長元年相列（可）小（可）おさる

高明

忠次為 母上小印

慶長六年尾列小生

孝

富永孫大史妻

孝

栗川將監忠正妻

忠次

若次郎 自水正 従五位下

母上小印

永祿六年尾列緒川小生

天正十年

大権現より詔入りてくま川原

曰十二年尾列長久寺合戦乃時

乃功河のときを母あやう

と小栗忠次為久次をりた

ていのちをまひりし

同十八年相列小田原御陣より侍を

大権現園東を領し大まよとき武列小

おわく千石乃采地をくさる其のら

奥列陣肥列名護屋等乃御陣小

御旗なり侍を

文禄三年父清秀はくさり小

正次家督をつつく五千石を相領を心

あのか千石ハ才守次より大まよ

慶長五年美田陣のとき

白徳院殿乃侍を

同七年下総よりおわく二千石の御加増

を相領を

同十年四月廿六日從五位下より叙を

同十二年大番取とる

同十九年大坂御陣のとき細中のみ

とおなりく江戸所本丸乃留守番を

はとむ

元和元年大坂再乱乃時五月七日御旗
本先のありり列して組中乃兵と下か
して其武功をくげり
曰三年に列りおわく二千石乃御加
増を御能く

曰九年

將軍家何れめて御上御乃とき大番の
中より正次と松平出雲守勝降とあ
人

白徳院殿乃命りり其組中を引わく
將軍家此後をも還御のとき正次河内
丹南郡よりおわく千石の御加増を御
領し大坂城代の領地として初合可
をこまひり

寛永七年十一月晦日御列大坂より死
六十八歳 法名淨照

守次

若三郎

母は上小田

天正二年尾列緒川小守

同十七年

大権現小法久をまろ小田原をまろなるをまろ

奥列関をまろ原をまろ於をまろ此陣をまろ一をまろ供をまろ

慶長十四年十二月十日後列をまろなるをまろ

二十六歳 法名をまろえい

茂久

後小守久をまろなるをまろ若七郎

母は花井勘三郎感次をまろの女

慶長四年相列をまろなるをまろ

同十五年

大権現小法久をまろなるをまろ大坂をまろの

陣をまろ一をまろ供をまろ

寛永十年大番をまろの組をまろ隊をまろなるをまろ

女子

守勝 もりかつ

善次郎

寛永十七年武列ぶつりつ江戸小室こむろ生

孝

上田清兵衛近次妻 うへだ せいへい ちかぢい さいめ

孝

那須忠兵衛正妻 なす ちゅうへい せいさいめ

孝

山田十次重利妻 やまだ じゅうじ ちゅうりき さいめ

正藏 せいざう

善次郎 自水正 ぜんじろう しみず せい

母ハ大久保次右衛門忠依女

天正十五年春列まはり

慶長三年

大権現

台徳院殿はくしんの御

同五年真田御陣まゐり

台徳院殿はくしんの御

同十九年大坂御陣おさかのとき供奉くわんぷを

同年上総うづまさの國くにの領地りやうぢを

元和元年大坂再亂おさかのとき馬山伯耆守うまやま

忠後ちごのみを教向しやうかう一いつ月七日天王寺宗

とひく合戦あはせのとき正成先陣まさなり小

み鏡みやうを阿んせくあんせくををり

一いつ月げつ七日にち天王寺てんわうじ宗

徳助とくすけ小林こばやし庄兵衛しやべゑ討死うちし本村次郎ほんむらた左馬

小田おだ左助さすけ敵たかををひひららぬぬ乃

底そこををりりてて正成まさなり命いのちををり

台徳院殿たいとくゑんの御功ごこうををり

國くに一いつととひひくく子こ石いし乃の加か増ぞうををしし海うみをを向むか
寛永三年十月三日よむいわけ從五位下みよ小こ叙ぎ
肥ひ前まへ守のり一いつ任にん也や後のち小こ水みづ正ただとと項かた
くくむむ日ひ七しち年ねん父ちち正ただ次つぎ死し一いつてて之この家いへ督とくと
いいきき正ただ成なりがが旧ふる領りやう二ふた千せん石いしとと子こ正ただ弘ひろ正ただ好よし元もと小こ
終つひ日ひ八はち年ねん小こ田た原はらのの攝しやく代だいととすするる
日ひ九く年ねん沖おほ書しよ院ゐん番ばんのの次つぎととすするる
日ひ十じゆ年ねん安あ房はうとと總そうののううららりりととすするる三さん千せん石いし
乃の沖おほ加か増ぞうををねねんんととすするる

日ひ十じゆ一年ねん大おほ番ばん頭づかひととすするる
寛永十二年かんえいじふにねん病やまひ一いつかか日ひとときき百ひやく十じゆ日にち
将しょう軍ぐん家けよりより松まつ平ひら伊い定ぢやう守しゆ信しん總そうをを沖おほ使し小こ
てて安あん危ゑいををととりり一いつむむ正ただ成なり釣つり糸いとののかかじじ
けけいいととすするる事ことををねねんんととすするる
日ひ年ねん四し月げつ二ふた日にち武ぶ列れつにに守しゆりりめめくく死しをを年ねん
九く歳さい法はふ名な道だう向むか

某 それ

竹音丸 たけねまる

是 こゝ 法名相見 しやうけん

正弘 まさひろ

若次郎 わかしら

母八山口但馬守重政女 はちやまぐちのつとむら守りしむら

慶長十八年武列江戸小倉 けいちょうじゅうはちねんぶりけいご

元和八年

右徳院殿

將軍家と物もの一いっそそももつつ

正好 まさよし

寛永十二年父正成死して後家督をのりつ

はき河内わたりの國くにめめ一いっ万石まんせきを領りやうす

若わとと母はは八はち上のうへおおりり

元和元年武列江戸小倉

同八年

右徳院殿

將軍家と物もの一いっそそももつつ

寛永七年父が領地のうち一千石を扱
領也

曰十二年父正麻率一して後又領地のうち
を千五百石下されて却合二千五百石を
領也

寛永十三年六月廿四日武列に戸外
死に二十二歳 法名性善 其家と法
く子なり

正房

長十郎 母いとにあり

元和六年武列に戸外

寛永十二年

將軍家を物一してまつりて房列小とお
て父が領地のうち千五百石を扱領也

宗

宗色正と庶母總妻

孝にや

子羽助氏定妻にの ちりすけ じやうぢや

孝

没樂之馬助貞原妻なげのますけ ぢんげん ぢや

貞まこと

若大丈母わかとぢや柴田純後守康長女しばた じゆんご しのぶ かつらぎ ぢや

寛永十二年武列ぶり江戶えど守しゆり

清長きよなが

若右為母わかとみ母はは江戶えど守しゆり

寛永十五年武列ぶり江戶えど守しゆり

正徳しょうとく

頼母助たのもし母はは江戶えど守しゆり

寛永十六年武列ぶり江戶えど守しゆり

女子

女子

家紋打遠鷹羽

父のしるしをいらす

高木 たけぎ

高木 たけぎ

初築忠兵衛 はつき
尾列義直 おしり
修理生國三列 しゆり

高木 たけぎ

高木長五郎

生國同前 なつくに

母ハ高木百水助清秀ノ女

白徳院殿ハシロノノ法ハシロノノ人ハシロノノ子ハシロノノ母ハシロノノ姓ハシロノノ人ハシロノ

高木タカキノ稱ナリモ高タカキノ義タカキ也タカキ御タカキノ法タカキノ人タカキ

可成カナラシ

安兵衛ヤスベエ

生玉武列ナマタマムツナリ

將軍家小使ノ人シマシマ

家紋凡内遠イノチノト宿ヤク名ナ也ナリ

高木 たかぎ

東 あづま

又五郎

既成

生國三列 なまくにさんれつ

大権現小法之入之

改信 かへしん

新助

既成

生國三列 なまくにさんれつ

^{きりぎり}
慶長四年

白徳院殿より法興よりくも山家

元和六年六月十日昔病死 三十八歳

^{まさなり}
改長

表次通

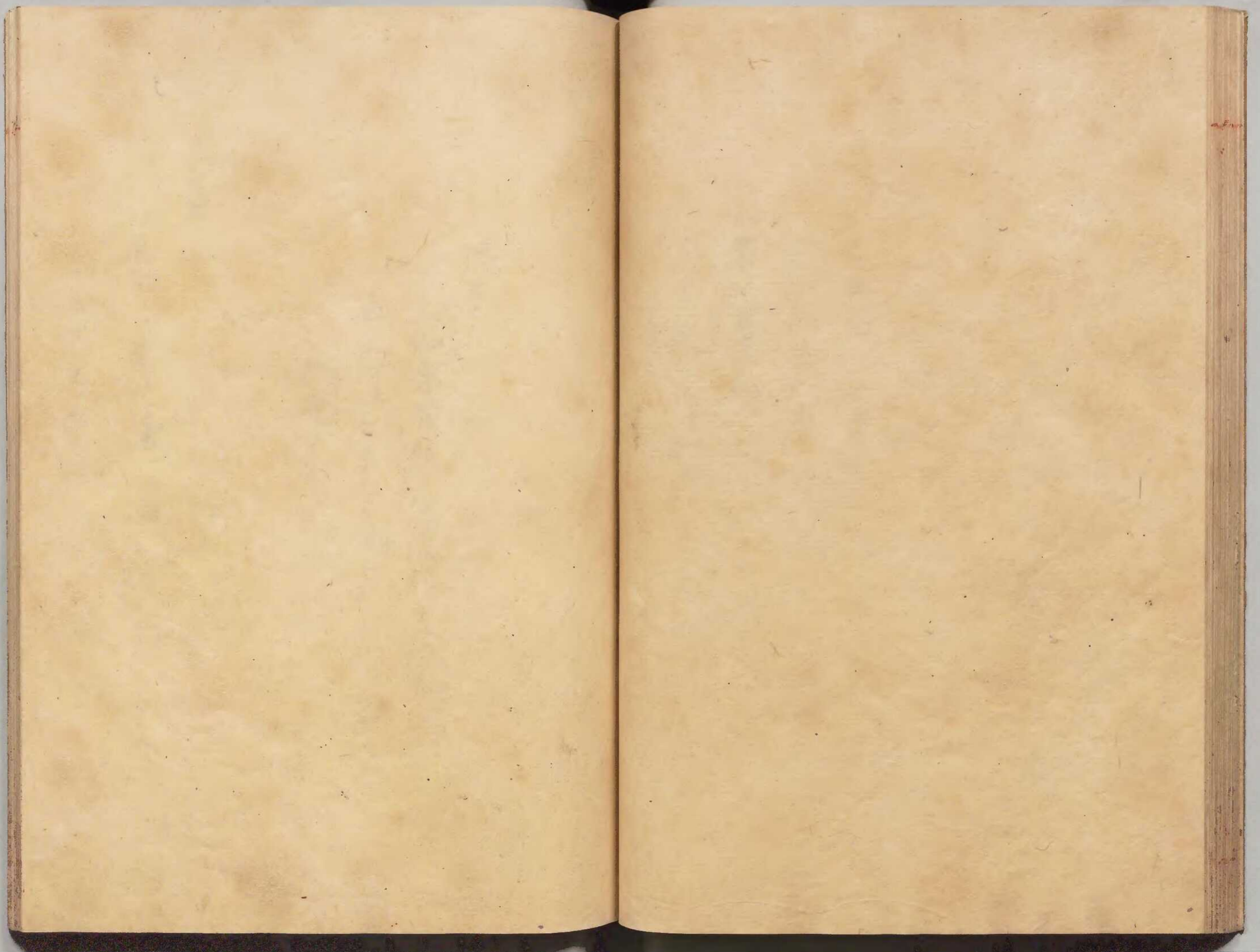
^{しんせきり}
生員武列江

寛永二年十月

將軍家小法久よりそま山家

日十年山加増を和領也

^{いのりしたりの人}
家紋鷹羽



高木 たけぎ

大和守頼親やまとのりよりの後胤信光のりよりの乃亮流也そのりやう
西三河言木にしみかわのを領事りやう小右左衛門こゑざゑもんを
いふ稱号なづかひなり

正重 ただしげ

九助 甚良清 西三河言木にしみかわのよし生なまり
永正六年えいせい病死びやうじ六十一歳

聖正 せいせい

九助七郎次郎 尾列本那色一
弘治元年三列上野一病死七十九歳

廣正 こうせい

九助 後筑後と号す 三列本よす
母八内海氏
永祿三年尾列小河小が張して水鏡下野

守と合我の時廣正名居部八為大系
八を右馬矢田作十郎政屋は魚大系保
七郎右衛門次右衛門松井次道等と曰
小河りて徳を河へせて軍功あり
曰六年酒井將監没落乃時三列上野
めで

東照大権現を御しそまうりそれより此
ふゆし一く本多八郎浪人と
あて加列小河りこまるとるかうり一あ

命いのちとうもくいんりいん廣正ひろまさげしいん孫いんと孫いん部いん
了いんはてしていんまいんらいんついんくいんそいんまいんういん

し廣正ひろまさが宅内たくないを孫いん八郎いん小川いんて孫いんせ
しいん

元龜三年げんき之方こ尔いん合いん我いん沖いん退陣たいじんのとき

廣正ひろまさ之いん川いんが鉄炮てつぱうをいんらいん多いん門いんていん八所いんを

かりのいんるいん之いん川いんをいんひいんしいんていんついんわいん令いんと

令いんまいんらいん本いんをいん始いんめいんらいん

天正三年てんせい幸いん引いん小山陣こやまのちんのとき廣正軍ひろまさのぐん

切河きりがわの家人けにん渡邊わたなべ烏色くろしほ也なり八郎いん烏色くろしほの孫いん也なり

是こゝよりいんていんよりいん廣正ひろまさがいんもいんこいんらいんきいんにいんまいんりいんよいん

大権現おほいけんげん廣正ひろまさが功いんを賞いんしていんきたいんまいんりいんの

御腰物ごこしもの乃なり金籠かねかご乃なり目貫めくわんをいんそいんゆいんついんらいん

廣正ひろまさよりいんたいんまいんしいん今いま小こここをいん不ふ持ぢといん又また殘ざん

五貫文ごくわんぶんをいん物もの八郎いん小川いんのいんここままりいんここままりいん

大権現おほいけんげん也なり八郎いん烏色くろしほといんりいんひいんないんりいんひいん

烏色也くろしほなり八郎いんといん別わかれいん也なり

同九年どうくわんねん奇あま率まう二十人にじゅうにんをいんあいんはいんりいんたいんまいんりいん

日十二年長久も合我とき廣正曰心二十
人を引かく言と御て決炮をさす心
曰心叔浦又十郎政員助を更伊波をさす
九苑持助市十郎也十郎早川也助也
歌を斬て首級とゆふふり残十
貫法とさす早川也助ハ流也
志右也と云祭とさすてさす
ゆ人別小三十貫とさす伊波をさす
を因東とさす石かされ

台徳院殿小法かりそまうり洲た島い洞いと

かり

曰十三年織田信雄

大権現い謂いたも時廣正取次いり是

一信雄尾列智多郡赤野色の

心々吾石の地を廣正いり

とさす廣正

大権現乃と聞いり連いりなれを領いり

きのひの作いり六年のる知いり

日十八年を別後列乃内ノ六百石此
加増を物領し今年圓東沖入國
又寄率三十人をあつた
初合五十人を支配し後長濃尾張
の浪人を石出さるり河廣正作小
て養者を法ごし
日女年武荒下統の内ノ加増あり
て二千石の地を領し

慶長四年

大権現廣正ノ命して武列悉乃城を寄
しむ廣正本多依渡守正信を以て再三
言上しつる冬近年沂寄ありしが
其と眼病のうも一河り録がくハ恩
先をうしめ本をよむな又釣命
あふ小し辞より本ありし
悉乃城色三千石の地なりび小大膳
家人二十騎寄率同心三十人あり
たもそのと隠居乃家比して悉の領

心こころ小ことひく千六百石の地をい海うみの向

同五年

大権現大坂おおさかより真まこと壺かを廣正小とくりた

よとりの

同十一年七月廿六日武列ぶつり悉ことごとく病びやう死し

七十一歳 法名大龍秀おほりゆうしゆ徳とく

来

又五郎

正信しょうしん

表おもて渡わた尉じ

正長しょうちやう

表おもて渡わた尉じ

正源しょうげん

小こ表おもて渡わた尉じ

大権現の命小より松平因幡守康元
一属也

昌孝

昌綱

小次郎尉

三次郎尉

正綱

九郎 三次郎尉 三列者良一也

母々村茂太郎次郎尉俊者むしとめ
天正十二年長久も合戦の時正綱敵を
討て首級を討つり正綱も又足なき

丁々
慶長四年

大権現の命小より父廣正り二千石の地
より一と奇率五十人をあはけ
らる

同五年上杉京勝謀叛の時

台徳院殿正綱をりて羅紗の御服
とく海より正綱奇率五十人を引お
又組中の軍士尾張筑のり日蓮大膳
水野大膳永田中郎次郎同勝大膳同若
尾海石川六次郎山本平六蔵川
長兵兼石凡孫次郎又羽衣若島と
同供を小列して宇部宮小つらそれり
まゝに台駕りてさうひそまう本号
海をゆく大坂りてさう

曰十年のりて申衣をさす

曰十一年父廣正死す

大権現正綱一余して悉の城を守

一め廣正隠居の地千六百石をなま
り又城色三千石の地小大膳奇率
三十人のりて亦人なまび小廣正が領を
海本の奇率五十人を阿つたなまり
り沖自巻乃御書と項戴も
寛永九年十月十日武列悉の城を

病死六十五歳
法名性空道把
廣正寺
と号す

正次

童名又七郎 九兵衛 筑後守

従五位下 生國寺別当 母正綱小田

天正十七年 後府より

大権現より 御錫して ちまひらけりて

まつ家内より 十五歳

曰十八年

台徳院殿を 移して 小田原御陣

の後 台駕より ちまひらけりて

被地より

曰年 沖入路の供

文禄二年

大権現乃 命小より 下 徳圃 葛筋郡 松

戸村なる 小根 本栗山の ちまひらけりて

宗地なる 御領

曰三年

台德院殿と野國緑野郡と栗須村と

加増の宋地をいへる

長五年と秋京勝謀及乃時

台德院殿中却宮もて沖教向の供を

とほむ

曰十年杏車舟人を河川

曰年布衣をゆるる

曰十八年下総國葛飾郡本郷村を

六百二十四石の宋地をいへる

曰十九年大坂沖陣の時沖使番中

少りて沖目付の役をほむ十二月四日

平頼り沖陣を思ふ小川川をき

乃釣命をいへる正次保科親貞を

曰天海をいへる

元和元年大坂再乱の時供を五月

六日

大権現八景田をいへる沖陣をいへる

台徳院殿を須那^{すな}一^{いち}陣を^をりた

あなごのむね正次^{まさつぎ}久貝^{くがい}因幡守^{いんぱんのかみ}釣^{つり}

命^{いのち}をうけ^うりてとまの^{とまの}おしき

を諸陣^{しよじん}小^こつりき^きせん^{せん}とめ大和^{やまと}

とあ^あして^{して}右^{みぎ}守^{のかみ}和泉^{いづみ}守^{のかみ}高虎^{たかとら}并^{なら}伊^い

掃部頭^{すまぶらうだう}忠孝^{ちゆうかう}陣^{じん}下^{した}り^りしる忠孝^{ちゆうかう}

正次^{まさつぎ}小^こい^いり^りる^る敵^{てき}意^い一^{いち}尾^お久^く法^{ほふ}寺^{てら}小^こ張^{ちやう}

は^は又^{また}御^ご馬^まを^をか^かれ^れて^てま^まる^る一^{いち}場^ば海^{かい}と^と

の^のし^しと^と言^いと^とま^ま一^{いち}正^{まさ}次^{つぎ}が^がし^しと^と敵^{てき}今^{いま}

か張^{ちやう}ま^まの^のお^おり^り我^{われ}事^{こと}一^{いち}あ^あり

き^きし^しる^るゆ^ゆを^を敵^{てき}を^を見^みる^る御^ご旗^{かた}本^{もと}に

ゆ^ゆと^とま^ま再^{また}三^{さん}儀^ぎ論^{ろん}も^も直^{ちゆう}孝^{かう}と

く御^ご馬^まを^を大^{だい}事^じ也^{なり}汝^{なんぢ}を^をま^まる^る

名^な匹^{ひつ}吏^しの^の勇^{ゆう}なり^{なり}何^{なに}も^も功^{こう}と^とま^まる^る小

た^たし^しる^るも^もゆ^ゆと^と言^いと^とま^ま一^{いち}と^と志

わ^わく^くい^いさ^さひ^ひる^るゆ^ゆ正^{まさ}次^{つぎ}御^ご旗^{かた}本^{もと}に

ゆ^ゆり^りま^まる^る言^いと^とま^ま一^{いち}な^なれ^れハ^ハ御^ご旗^{かた}本^{もと}に

大権現（下上）一是（れ）小（ら）して正次（が）野田

一（ら）りて言（ふ）ともあるに（と）ひて

か馬（あり）

日月七日合（は）我（は）乃（は）河（は）敵（は）兵（は）敗（は）走（は）味（は）方（は）

乃（は）衆（は）もよ（も）る人（を）を（も）る（ら）ふ（ら）り正次

馳（り）入（り）てこれを見（え）れ（る）敵（は）兵（は）一（は）人（も）り

と（は）な

白徳院殿乃河前（は）て軍功（は）の勝方（は）と

評議（は）一（は）た（も）り河正次（は）事（は）と村（は）濃

在馬助言（ふ）とも（は）な正次（は）も（も）んで城

際（は）一（は）り河一（は）久世（は）三（は）中（は）板（は）部

三十郎池耳（は）も（も）か河使（は）番（は）三（は）相

は（は）い（は）そ（は）も（も）み耳（は）の城（は）中（は）火（は）の年

河（は）ら（は）と（は）見（え）る（ら）正次（は）河（は）本陣（は）一（は）河（は）て

白徳院殿一（は）志（は）し（は）り（は）ひ（は）そ（は）も（も）う（ら）茶（は）麩

山（は）一（は）り河河陣（は）の後（は）六（は）日（は）の合（は）戦

一（は）正次（は）が河河（は）と言（ふ）と（は）一（は）事（は）と

祿（は）一（は）た（も）り

和徳院殿相列言座郡市庄郷小をひそ

千石の地をたまらう久貝も同しく

領地をくま

曰二年上総丹志輝日所改易のとき

治一とく正次越後國一也

國中の本を治治

曰年所持尚所殊物心五十五人と

あけふいこまより正次があけ

りつふれ歩率前河部播津守小

河治けら

曰八年本多と野舟正純永井右を左

史重勝を相列完上一ははて國

政をくま一は正純罪をり

依て配流の時正次が小伊丹播磨

守康勝其本をくけりて正純

父子を油利小なり

曰九年上総國植生郡柴原村長衆

寺村英陽郡常谷村三ヶ本とて家

地千石の沖加増をしまりり勘合三千
三百餘石を領せ

曰年沖入海乃供養河一越若宰相

忠直自沖改易一そ九列小配流乃

とき正次と使より一系よりあ度致

前よりよむ

寛永三年十月廿八日從五位下一叙

一筑後守より一任せ

曰九年

右徳院殿兼沖のち

將軍家一一人そむいふ

曰年濟士十人を阿づけらる

曰十九年三月正次老年一そふり

公役をゆらる

正勝

九兵衛尉 生島武統

實ハ服部与十郎改直が子なり 正次

こまきやーなつて子とを

寛永十六年十月十六日築

將軍家と御一そもの家

孝

永田彦太尉重貞が妻

孝

渥美久兵衛尉友重が妻

正則

九助 甚太連 生必武花

母ハ酒井徳後守忠利がむすめ

慶長十八年武列悉一とひそ

大権現と御一そもの家

同年武列徳築とて

台徳院殿を御一そもの家

元和四年

將軍家を治しそま川に

寛永十年三月

將軍家の命小降り父正綱が遺跡をつぎ

先率五十人をあづかりて所前（あ）

かされて作らるゝ愚の城を松平信定守

りたまふ所の名汝分（あ）りし

在領（あ）と云

同年八月沖書院番のく（あ）りし

同年十二月竹若（あ）かされて申（あ）り

七百石の地の沙加増を領（あ）一郡令

四千石を領（あ）

同十一年沙入返の供奉

同十六年正別病小降り（あ）一軍

上開（あ）りて沙役をゆ（あ）る

正後

大兵請尉

正直ちやうじき

勘右衛門尉

孝こゝろ

森川庄九郎氏もりがわのさぶらうのうぢ雷かみなり妻めかけ

孝

牧野依波守親まきののよなもりのおや成なり妻めかけ

孝

永井ながい氏のうぢ直義ちやうぎ妻めかけ

正武ちやうぶ

九助くすけ母はは土井つゐ大炊頭おほくひづかみ利勝りかつ養子やしよなりて
実まこと土井つゐ内蔵うちざう元元げんげん政まつりがむしめなり

寛永十年

將軍家しやうぐんがをおりしてまり

女子

このしとりのく
家紋書羽二本打透

高木 たかぎ

貞政 まこと

城之助 しろのすけ

生國長濃駒野の城之助 しやうこくながののまののしろのすけ

赤坂山城守 あかさかやましろまもり

貞次 まこと

西願 にしげん

生國同茶領不田茶 しやうこくどうぢやうりやうふぢやうぢやう

新坂山城守しんさかやまのまもり一いち行ゆき云い

貞久まこと

表丸透尉うわらぬらぬら

しんさかやまのまもり生必同前位なまかた同前なまかた

秋後山城守あきごやまのまもり一いち行ゆき云い英濃國ひのくに信長のぶながのの

一いち時とき信長のぶなが一いち行ゆき云い加増かぞへあり

一いち今尾いまお乃の城しろなりなり一いち小坂こさか乃の村むらを

守まもりり十六じゅうろく歳さい乃の時ときよりより牧まき度どのの働はたらき

是こゝよりより

天正十一年てんしゅうじゅういちねん病やま死し

貞友まこと

坂兵衛さかべゑ 生必同前位なまかた同前なまかた

信長のぶなが他ほか衆しゆ乃の後のち貞久まこと死してして是こゝ跡あと約やく指さし

を貞友まこと一いち行ゆき云い

尾お列り小牧こまき表うら沙さよりより阿あ比ひののときとき秀ひで吉よし

一いち行ゆき云い味あじ方かた一いち行ゆき云いままつつ方かた一いち行ゆき云い門かどのの中なか

一いち宮川みやがわ伊い心こころをを一いち行ゆき云いたたびび一いち行ゆき云い

たまたまとして信長の時より河越志
をいふ方也

東照大権現（河味方小まじり母と尾張内
府一人質）一献され

大権現御感（お河）めされ
野清兵未有人を河を行きて
城の善法を治す

長久と河合我の引足小秀吉か
城をせめ竹鼻城を水攻り又約略の

城をせめ河合（お河）一とて岡井の順多英

濃三人先もとて津屋志津と
不もて秀吉働きたまふとて

ありせめりせたまふとて津屋に
付城をこしらへ稲葉右京父子こめ

とて進秀吉いをい詔（人数とせらる
慶長五年圓が示表

大権現御馬を出さん角とて林永玄部
太捕又羽助助水將大膳香根村を地

見小出向とて右の三人約指(きく)あ
しを貞友案内者として河屋の境
まそ外でゆり小太の三人約指(きく)
りり一折り尾張乃解法に色り
火のもれ河屋と不審一音紙村の
るもいさく

大権現より河屋進河り多ハ茶田幸
高謀反をくりとて瀧川辰を舟
り引りその一まこゆり右三人

のものをいさき解法に(きく)あ
下る志をく河りて解法に小火のも
河りいゆ今尾根右河屋辰の三ヶ
林りりさきかとりても約指ハ
別後が
小牧教河をわ乃後尾張内府小志
りひてこもあるなり

大権現より内府(河屋)入ら進りハ言木見
水のものいさく小折りつを進たもあ

加増はくくされたる庵きのりりて
内府よりそ可貫兄才三人小下さる
小田原陣のとき尾張内府の供
し—土方勤兵未々みく先ん
ききて仕寄の場一城申より本
討りし—本より貞友曰ふ平兵未曰
兵未歎小出のい三人か—矢底張底
あまのいりあり
文禄元年言藤原陣のとき加増を江組

そ—渡海—朝鮮乃却—を陣の時
大明鏡朝鮮乃加増—の—きき
かれん加増を江組に美井但馬々みく干渉
死抱え—ゆき大明鏡の陣場りく
り—つけや—もえきりて—り—を大
明鏡跡を去るひてか所少味方あり
く小なる討り—田中表々未内取平六
細指の添田忠兵未榎奥清十郎貞友
は—六人共の—り—て足將一人を

うららとせむ引と家なむ川山小高礮
のよの丸かをうらら(一)そこよのうらら(一)
部小そま(一)人数を決りつれせめらる
時右の六人揃の勢も(一)うらら(一)一番小の
つけいばまの軍功を(一)けり(一)痕を
か(一)うらら(一)は(一)く味方(一)こま(一)なり
ゆ(一)ひき(一)うらら(一)高礮(一)のま(一)こに陣(一)を(一)も
うら(一)田(一)を(一)刈(一)藪(一)を(一)も(一)うら(一)人(一)足(一)も(一)を(一)足
人(一)出(一)あ(一)ひ(一)うら(一)ら(一)も(一)も(一)つ(一)ま(一)か(一)の(一)人(一)を

お(一)う(一)ら(一)と(一)そ(一)お(一)の(一)く(一)人(一)数(一)を(一)い(一)ま(一)時
貞(一)友(一)の(一)も(一)も(一)一(一)け(一)つ(一)け(一)三(一)田(一)村(一)平(一)太(一)海(一)が
足(一)根(一)を(一)引(一)つ(一)ま(一)人(一)を(一)う(一)ら(一)頭(一)も(一)六(一)十
う(一)ら(一)と(一)う(一)か(一)友(一)を(一)江(一)高(一)礮(一)と(一)病(一)死(一)ゆ

貞友海朝のうら

大権現(一)可(一)出(一)ま(一)か

其田陣のゆき

白徳院殿所供(一)を(一)中(一)部(一)宮(一)ま(一)て(一)お(一)も(一)て

大権現(一)小(一)山(一)に(一)陣(一)を(一)ま(一)し(一)ま(一)し(一)ま(一)す(一)ま(一)す

石田治部が補謀及のきらしりたれ
関ヶ原一歩進教のしめ貞友兄弟
濃尾張の業内者となり御先一系
きの命小り本多中書忠勝井伊
が補正政小しそらま清須ま
まて教向し清須まともたり
の少き小約指し石田が人数三千
りかえりりしきらしれど徳永法
平市橋下総横井伊織貞友兄弟
乃業内者しるるる系属きしりおろく

乃業内者しるるる系属きしりおろく
ゆきりし小川き貞友人數まきりし
もた郷しるゆ兄弟三人約指乃城
らくしるしき徳田まき波阜お
その相番の火のしをいんすま扱
りなりて徳永法平一城をます
が系内合戦のきらみ小約指おし
在番し関ヶ原為居ま本領を給
きの作ありしら舊里しりし

らんとするの可なりこまより先小秀を
より徳永法平（貞友の本領のよりを）
たましくゆい貞友の志多良のうらを
お領を
大坂陣のこまを為度なり平方
のおと小英濃の元組より陣を

貞家

老七郎

貞俊

次郎兵衛

貞元

了兵衛

貞重

中右衛門



貞長

傳助

生息武列

実々今村傳常正長り子なり

元和六年

台徳院殿を修しそまひに

寛永六年

將軍家より法か()そまう()番()

日十六年貞友美子となり高本を

貞利

指右馬

信長より親表()貞久()今尾()

城()近()の領地を()

貞利も今尾の城()

長篠()合戦()とき()家()全()

高()

貞盛 まこと

平兵衛

貞勝 まこと

権右衛門

家紋丸内番三 この上まんのうりふたあぐり

